終戦前後

私にとっての戦後

春田ミヨ
新井四丁目

私の古里　戸数三二。戦死者十名
私の祖母　旧満州で逃げる途中、ソ連軍に撃たれ死亡
私の姉　祖母と同行動。九死に一生を得る。男児は死亡
私の兄　特攻隊の生き残り
主人の両親　三月十日の、あのど真ん中で、生命だけは助かる。

ざっと身辺だけでもこういった情況でした。戦争は終わっても、それからが戦いなのです。小さな借家に二世帯、橋の下や土管の中に比べれば贅沢は申せませんが、必ずしも安住の場ではありませんでした。金も無ければ着る物もなし。其の上今夜の食べ物なし。これが私共の出発点でした。

昭和二二、三年頃だったでしょうか。主人のオーバーはみすぼらしい限りでした。それは主人の父のお古で、父たちが逃げる時着て出たので助かった物だそうです。「あの時いい方を着て出ればよかったのになあ。逃げるのだから悪い方を着て出たんだよ」と父の言ったことがいまだ心に残っています。

これを何とか良くしてあげたいと思う一心でしょうか、大金でしたが二千円で裏返しをする事にしました。立派に出来上がりました。とは申せ、高は知れているのに。でもあの時の嬉しさといったら、一家を挙げての大よろこびでした。何故あんなに嬉しかったのでしょう。今時十万円の服を買っても、あの頃のような感動はおこりません。懐かしい思い出のひとこまです。

ああした中で、何とかせねばと一生懸命だったのでしょう。思えばこれが幸せというものでしょうか。そしてあの頃のあの思いが、今日へのバネになったのでしょう。若かったし。それにしてもああいう情況の中で死んで逝った両親は、何ともかわいそうでした。主人は末っ子で、年の差もあり、私もようやく親の年になりました。そのせいでしょうか。頻りにあの頃の親の姿が思い出されます。

あれから四六年。大きく時代も変わり、日本は経済大国と言われて久しく……。私達もコツコツと一生懸命に暮らして来た

のですから、それなりに溜まって来たのも不思議ではありません。しかしながら、こうして得た勤労者の財産にも、やがては重い税金が待っているとか、あるいは老後の資金にと託したお金が、バブル経済とやらに吸い込まれる。若い世代が一生働いても持ち家はむずかしいといった今日の現象。悩み多いこの頃です。林立する高層ビル。「あれは借金コンクリートです」とも聞きました。経済大国とはこういうものなのでしょうか。